

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

新林遺跡 e 地点

高津館跡 c 地点

新東原遺跡

上高野大山遺跡

逆水遺跡 c 地点

高津中村遺跡

白幡前遺跡 b 地点

作山遺跡

内込遺跡 b 地点

二重堀遺跡 e 地点

殿台遺跡 b 地点

本郷台遺跡

平成 14年度

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成13年度市内遺跡発掘調査事業として、国及び県の補助金を受けて実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査遺跡名及び所在地、調査期間、調査面積、調査原因、調査担当は下記のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	新林遺跡 e 地点	上高野字稲荷前1161-2他	平成13年4月17日 ～ 平成13年5月11日	確認調査 288㎡/2,068.13㎡ 本調査 231㎡	宅地造成	宮澤久史
2	高津館跡 c 地点	高津字部田1336-1他	平成13年4月18日 ～ 平成13年5月7日	確認調査 38㎡/336㎡	携帯電話用無線 基地局建設	森 竜哉
3	新東原遺跡	勝田字新東原1282-1他	平成13年6月21日 ～ 平成13年7月4日	確認調査 264㎡/9,717㎡	病院建設	朝比奈竹男
4	上高野大山遺跡	上高野字笹根込406-1	平成13年7月18日 ～ 平成13年7月23日	確認調査 上層104㎡/490.67㎡ 下層 3㎡/490.67㎡	店舗建設	朝比奈竹男
5	逆水遺跡 c 地点	米本字鳥ヶ谷1206	平成13年8月16日 ～ 平成13年8月23日	確認調査 250㎡/2,919㎡	盛土造成	宮澤久史
6	高津中村遺跡	高津字中村1116-2	平成13年8月20日 ～ 平成13年8月31日	確認調査 34.3㎡/214㎡	携帯電話用無線 基地局建設	朝比奈竹男
7	白幡前遺跡 b 地点	置田字堂ノ後1757-1他	平成13年9月17日 ～ 平成13年9月21日	確認本調査 214㎡	護護壁建設	森 竜哉
8	作山遺跡	小池字作山412-1他	平成13年9月25日 ～ 平成13年10月9日	確認調査 244.5㎡/2,323.61㎡	知的障害者授産 施設建設	森 竜哉
9	内込遺跡 b 地点	八千代台北(字内込)17-14	平成13年12月7日 ～ 平成14年1月8日	確認調査 上層236㎡/2,013㎡ 下層 3㎡/2,013㎡	宅地造成	朝比奈竹男
10	二重堀遺跡 e 地点	上高野字二重堀1236-15他	平成13年12月14日 ～ 平成14年1月25日	確認調査 上層402㎡/2,384.11㎡ 下層 20㎡/2,384.11㎡ 本調査 128㎡	宅地造成	宮澤久史
11	殿台遺跡 b 地点	上高野字平沢148	平成14年2月22日 ～ 平成14年3月4日	確認調査 68㎡/801㎡	資材置場建設	宮澤久史
12	木塚台遺跡	桑橋字サゴテ670、675-1、676、678	平成14年3月7日 ～ 平成14年3月26日	確認調査 394㎡/5,100㎡	土砂採取	常松成人

3. 整理作業は平成13年度事業として平成14年1月4日から3月29日までの期間行い、報告書印刷作業は平成14年度事業として平成14年12月2日から平成15年3月2日までの期間行った。
4. 本書の執筆は、武藤健一が 1 誌を、宮澤久史が 1・5・10 1 誌を、森竜哉が 2・7・8 を、朝比奈竹男が 3・4・6・9 を行った。
5. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、関係機関並びに多くの方々のご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。(敬称略)

千葉県教育庁生涯学習部文化財課 佐倉市教育委員会 安養院 岩淵令治 藤原徹 安室知

目 次

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

調査に至る経緯	1
各遺跡の概要	5
1. 新林遺跡 e 地点	5
2. 高津館跡 c 地点	9
3. 新東原遺跡	10
4. 上高野大山遺跡	12
5. 逆水遺跡 c 地点	13
6. 高津中村遺跡	15
7. 白幡前遺跡 b 地点	16
8. 作山遺跡	18
9. 内込遺跡 b 地点	20
10. 二重堀遺跡 e 地点	22
11. 殿台遺跡 b 地点	27
12. 本郷台遺跡	28

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 市内遺跡位置図	3
第 2 図 新林遺跡位置図	5
第 3 図 新林遺跡 e 地点遺構配置図	6
第 4 図 新林遺跡 e 地点陥穴・シシ穴実測図	7
第 5 図 新林遺跡 e 地点溝実測図	8
第 6 図 高津館跡位置図	9
第 7 図 高津館跡 c 地点トレンチ配置図	9
第 8 図 新東原遺跡位置図	10
第 9 図 新東原遺跡遺構検出状況図	11
第 10 図 上高野大山遺跡位置図	12
第 11 図 上高野大山遺跡トレンチ配置図	12
第 12 図 逆水遺跡位置図	13
第 13 図 逆水遺跡 c 地点遺構検出状況図	13
第 14 図 逆水遺跡 c 地点出土遺物	14
第 15 図 高津中村遺跡位置図	15
第 16 図 高津中村遺跡トレンチ配置図	15
第 17 図 白幡前遺跡位置図	16
第 18 図 白幡前遺跡 b 地点遺構配置図	16
第 19 図 作山遺跡位置図	18
第 20 図 作山遺跡遺構検出状況図	19
第 2 図 内込遺跡位置図	20
第 22 図 内込遺跡 b 地点遺構検出状況図	21
第 23 図 二重堀遺跡位置図	22
第 24 図 二重堀遺跡 e 地点遺構配置図	23
第 25 図 二重堀遺跡 e 地点炉穴・土坑実測図	24
第 26 図 二重堀遺跡 e 地点 09F 出土遺物	25

第 27 図	二重堀遺跡 e 地点溝実測図	26	第 30 図	本郷台遺跡位置図	28
第 28 図	殿台遺跡位置図	27	第 31 図	本郷台遺跡遺構検出状況図	29
第 29 図	殿台遺跡 b 地点トレンチ配置図	27	第 32 図	本郷台遺跡出土遺物	30

図 版 目 次

図版 1	新林遺跡 e 地点
図版 2	高津館跡 c 地点・新東原遺跡・上高野大山遺跡
図版 3	逆水遺跡 c 地点・高津中村遺跡・白幡前遺跡 b 地点
図版 4	作山遺跡・内込遺跡 b 地点・二重堀遺跡 e 地点(1)
図版 5	二重堀遺跡 e 地点(2)
図版 6	殿台遺跡 b 地点・本郷台遺跡

調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベットタウンとして開発が進んだ地域であり、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、さらにこの性格を強めている。そうした状況の中、八千代市教育委員会では千葉県教育委員会の指導のもと、開発業者からの「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち確認調査が必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け市内遺跡発掘調査事業として調査を実施している。

以下は、平成13年度に市内遺跡発掘調査事業として発掘調査を実施した遺跡の調査に至る経緯である。

新林遺跡 e 地点

平成13年3月2日、協和不動産株式会社より市内上高野字稲荷前1161-2地の2068.13㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は砂利敷きの駐車場であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、西側隣接地や過去の周辺の調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、3月9日その旨回答した。その後、この回答に沿って協和不動産株式会社と協議した結果、4月2日文化財保護法第5条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、準備が整った4月1日に調査を開始した。

高津館跡 c 地点

平成13年3月1日、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモより市内高津字部田1336-1地の336㎡について携帯電話用無線基地局建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は竹林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の城館跡の範囲内であり、近接して土塁と堀が確認できることから、照会地全域について確認調査が必要と判断し、3月9日その旨回答した。その後、この回答に沿って株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモと協議した結果、4月6日土木工事の届が提出され、準備が整った4月1日に調査を開始した。

新東原遺跡

平成13年3月9日、米元孝之氏より市内勝田字新東原1282-1地の971㎡について病院建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は山林・荒蕪地及び畑地で、山林・荒蕪地においては遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。また、畑地においては遺物の散布を確認することはできなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であることから、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、5月7日その旨回答した。その後、この回答に沿って米元孝之氏と協議した結果、5月2日土木工事の届が提出され、準備が整った6月2日に調査を開始した。

上高野大山遺跡

平成13年6月15日、姪間秀夫氏より市内上高野字笹塚込406-1の490.67㎡について店舗建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は畑地であったが、遺物の散布を確認することはできなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であることから、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、6月27日その旨回答した。その後、この回答に沿って姪間秀夫氏と協議した結果、7月2日土木工事の届が提出され、準備が整った7月1日に調査を開始した。

ひらきみ

逆水遺跡 c 地点

平成 13 年 7 月 6 日、有限会社高橋起業より市内米本字鳥ヶ谷 1206 の 2 919㎡について盛土造成のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は荒蕪地で一部削土された状態であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去に現地踏査によって削土されている部分において住居跡と思われる遺構の一部が確認されていることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、7 月 23 日その旨回答した。その後、この回答に沿って有限会社高橋起業と協議した結果、8 月 10 日土木工事の届が提出され、準備が整った 8 月 16 日に調査を開始した。

たかつなせむら

高津中村遺跡

平成 13 年 7 月 17 日、ジェイフォン東日本株式会社より市内高津字中村 1116 の 214㎡について携帯電話用無線基地局建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は畑地で、稀少ではあるが遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、稀少ではあるが遺物の散布を確認できることから、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、8 月 2 日その旨回答した。その後、この回答に沿ってジェイフォン東日本株式会社と協議した結果、8 月 10 日土木工事の届が提出され、準備が整った 8 月 20 日に調査を開始した。

しろはらまさ

白幡前遺跡 b 地点

平成 13 年 9 月 13 日、岩井流子氏より市内萱田字堂ノ後 1757 帖の 214㎡について擁壁建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は屋敷林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、西側隣接地において平成 13 年 9 月現在発掘調査を実施中であることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、9 月 26 日その旨回答した。なお、緊急性が高かったため、回答に先立って事前に岩井流子氏と協議し、調査は 9 月 17 日に開始した。遅れて 9 月 25 日土木工事の届が提出された。

さくやま

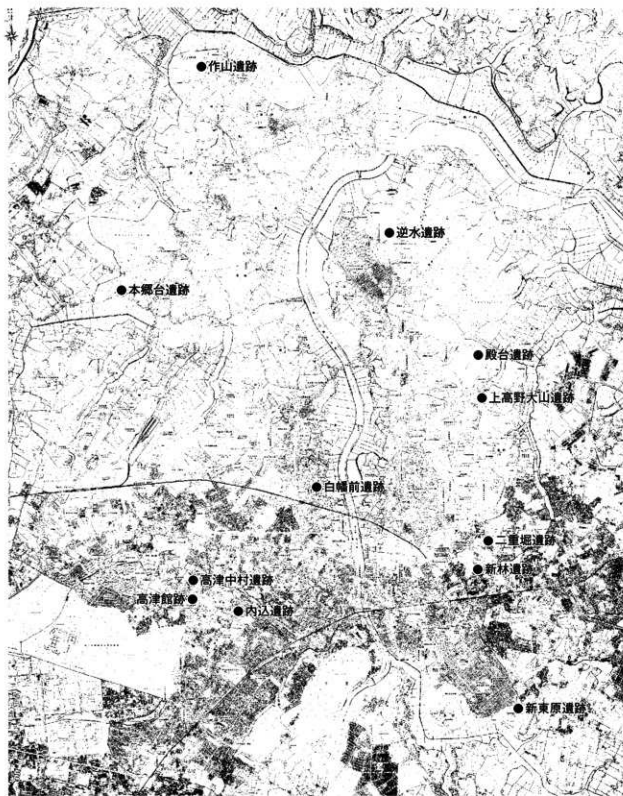
作山遺跡

平成 13 年 7 月 11 日、豊田英樹氏より市内小池字作山 412 帖の 1 225㎡（後日 2 323 6㎡に変更）について知的障害者授産施設建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は荒蕪地及び山林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であることから、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、7 月 25 日その旨回答した。その後、この回答に沿って豊田英樹氏と協議した結果、8 月 2 日土木工事の届が提出され、準備が整った 9 月 2 日に調査を開始した。

うらご

内込遺跡 b 地点

平成 13 年 10 月 29 日、岩井稔氏より市内八千代台北（字内込）17 14 の 2 013㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は畑地であり、遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、東側隣接地の調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、10 月 31 日その旨回答した。その後、この回答に沿って岩井稔氏と協議した結果、1 月 2 日土木工事の届が提出され、準備が整った 1 月 7 日に調査を開始した。



第1図 市内遺跡位置圖 (S = 1: 50 000)

ふたえぼり 二重堀遺跡 e 地点

平成 13 年 11 月 14 日、永井和代・田中美智子氏より市内上高野字二重堀 1236 19 地の 2 384 1㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は畑地であったが、遺物の散布を確認することはできなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、11 月 19 日その旨回答した。その後、この回答に沿って永井和代・田中美智子氏と協議した結果、12 月 4 日土木工事の届が提出され、準備が整った 12 月 14 日に調査を開始した。

とのだい 殿台遺跡 b 地点

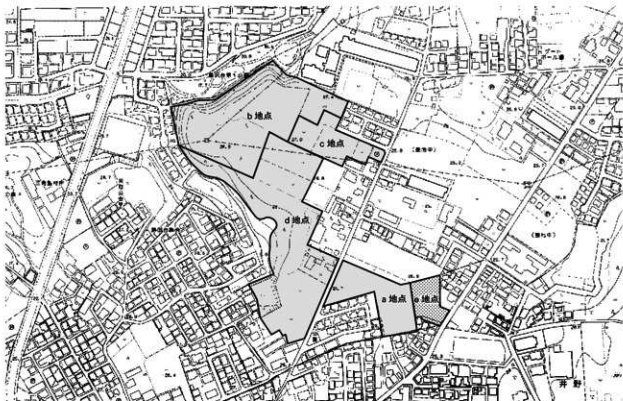
平成 14 年 1 月 2 日、山崎重信氏より市内上高野字平沢 148 の 80㎡について資材置場建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は竹林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査の実績から、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、1 月 30 日その旨回答した。その後、この回答に沿って山崎重信氏と協議した結果、2 月 1 日土木工事の届が提出され、準備が整った 2 月 2 日に調査を開始した。

ほんごうだい 本郷台遺跡

平成 14 年 1 月 28 日、白井良夫氏より市内桑橋字サゴテ 67 地の 5 77㎡について土砂採取のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は山林及び荒蕪地で、山林においては遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、台地上の荒蕪地では削土等により地形が改変された状態であったものの、遺物の散布を確認することができた。照会地内の台地部については周知の遺跡の範囲内であり、遺物の散布が確認できることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地の台地部 5 100㎡についてのみ確認調査が必要と判断し、2 月 5 日その旨回答した。その後、この回答に沿って白井良夫氏と協議した結果、2 月 18 日土木工事の届が提出され、準備が整った 3 月 7 日に調査を開始した。

各遺跡の概要

1. 新林遺跡 e 地点



第2図 新林遺跡位置図 (S = 1: 5000)

遺跡の立地と概要

新林遺跡は、地域の南部、新川の東岸にある辺田前の低地から東に延びる谷の南側台地上に立地する遺跡の一つで、遺跡北方には縄文時代を中心とする二重堀遺跡、上谷津台南遺跡等が展開する。新林遺跡のこれまでの調査では、a地点で近世のシシ穴列が、b地点で縄文時代の土坑1基と縄文時代前期～後期の土器片が、c地点で縄文時代中期（加曾利E期）の竪穴住居跡2軒と縄文時代の土坑群が、d地点で縄文時代前期の土坑、竪穴住居跡、土器片等がそれぞれ検出されている。今回の調査区域は、a地点の東側に隣接する地点になり、標高は約26mで、南側へと若干の傾斜をしている地形である。佐倉市との市境にあたる場所で、現況は駐車場及び荒蕪地であった。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に合わせて5m 5mのグリッドを設定し、その区画を基に2m 4mのトレンチを10m間隔で配置し、遺構の検出に努めた。また、必要に応じてトレンチの増設・拡張等を行った。

調査期間は、平成13年4月17日～同年5月1日である。4月17日に機材搬入等環境整備、現況写真撮影を行い、グリッド設定に着手する。4月18日にグリッド設定を終了し、人力による表土除去及び包含層調査を開始する。4月19日から包含層調査と平行して重機による表土除去作業を行う。4月20日に包含層調査を終了し、遺構確認作業に着手する。4月22日に重機表土除去作業を一端中断し、4月24日に遺構検出作業を終了し、写真撮影等の記録作業に着手し、一部、遺構調査にも着手する。24日には重機による調査区域の拡張を行い、遺構確認作業のかたわら、遺構調査を継続した。4月27日には、遺構検出作業を終了し、確認調査を終了する。同日、遺構調査を本格的に開始する。5月1日迄の間、各遺構の覆土掘削、記録作業等を平行して行い、5月1日、全景写真を撮影し、機材撤収を行い、調査の全工程を終了した。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、表土、ソフトロ-ム層であった。遺構確認作業は、層上面で行った。その結果として縄文時代の陥穴1基、近世のシシ穴5基、溝1条を検出した。また、遺物包含層は検出されなかった。以下、検出された遺構についての記述に移りたい。

06P

調査区南側に位置し、単独で存在する。隅丸長方形のプランで、長軸196m、短軸087m、確認面からの深さ07mの土坑である。底部は、ほぼ平坦で、隅丸方形の浅い小穴を3基伴っていた。また、底部の幅は059mであった。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は色調を基本的に6層に分層され、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は出土していないが、遺構の形態、規模及び覆土の観察等から縄文時代の陥穴と考えられる。

01P

調査区北側に位置し、同様の規模、形態の土坑が連続して5基並ぶうちの1つ

で、楕円形のプランを呈する。長軸379m、短軸269m、確認面からの深さ230mであった。断面は漏斗状の形態で、底部は、平坦であるが非常に狭く、幅013mであった。小穴等の付属施設は検出されなかった。また底部の長軸方向の立ち上がりは、オ-バ-ハンクしていた。覆土は色調を基本的に10層に分層され、人為的な埋め戻しが考えられ、更に掘りなおしているため、2段階の堆積状況を呈している。遺物は出土しなかった。

02P

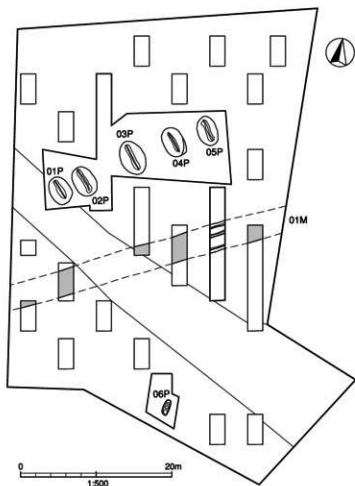
01P同様、調査区北側に位置し、隣接する遺構として01P、03Pがある。楕円形のプランを呈する。長軸379m、短軸269m、確認面からの深さ230mであった。断面は漏斗状の形態で底部は、平坦であるが非常に狭く、幅013mであった。小穴等の付属施設は検出されなかった。底部の長軸方向の立ち上がりはオ-バ-ハンクしていた。覆土は色調を基本的に9層に分層され、人為的な埋め戻しが考えられる。遺物は出土しなかった。

03P

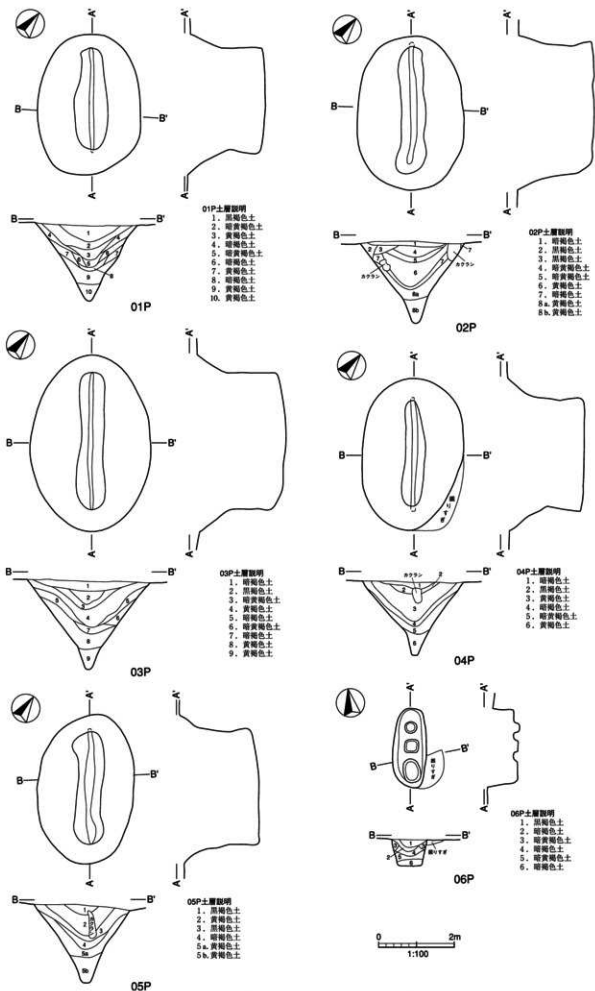
調査区北側に位置し、隣接する遺構として02P、04Pがある。楕円形のプランを呈する。長軸469m、短軸320m、確認面からの深さ233mであった。断面は漏斗状の形態で、底部は、平坦であるが非常に狭く幅010mであった。小穴等の付属施設は検出されなかった。底部の長軸方向の立ち上がりは、垂直あるいは一部オ-バ-ハンクしていた。覆土は色調を基本的に9層に分層され、人為的な埋め戻しが考えられ、さらに2段階の堆積状況を呈していた。遺物は出土しなかった。

04P

調査区北側に位置し、隣接する遺構として03P、05Pがある。楕円形のプランを呈する。長軸307m、短軸269mで、確認面からの深さ197mであった。断面は漏斗状の形態で、底部は、平坦であるが非常に狭く、幅015m



第3図 新林遺跡e地点遺構配置図

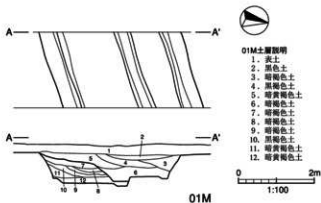


第4図 新林遺跡e地点陥穴・シシ穴実測図

であった。底部の長軸方向の立ち上がりは、オ・バ・ハングしていた。覆土は色調を基本に6層に分層され、人為的な埋め戻しが考えられる。遺物は出土しなかった。

05P

調査区北側に位置し隣接する遺構として04Pがある。楕円形のプランを呈し、長軸391m、短軸253m、確認面からの深さ200mであった。断面は漏斗状の形態で、底部は、平坦であるが非常に狭く、幅0.18mで、小穴等の付属施設は



第5図 新林遺跡e地点溝実測図

検出されなかった。底部の長軸方向の立ち上がりは、オ・バ・ハングしていた。覆土は色調を基本に6層に分層され、人為的な埋め戻しが考えられる。遺物は出土しなかった。

01M

調査区中央を東西に延びる溝で、北側で検出されている01Pから05Pの土坑群とはほぼ平行した位置関係にある。幅は約36m、確認面からの深さ約0.82mであった。覆土は色調を基本に1層に分層された。覆土の観察から新旧2本の溝があったことが判明。古い溝の底部はほぼ平坦で口・ムと暗褐色土の混合された土で良くしまり硬化面を形成していた。道状の遺構と判断される。新しい溝は古い溝が自然堆積により埋没した後、掘りなおして造られた溝である。底部はほぼ平坦であるが、両脇に側溝のような溝を検出している。硬化面は検出されなかったが口・ムの底面で硬い底面であった。新旧両溝とも遺物は出土しなかった。用途について詳細は不明だが、古い溝同様、道路的なものが想定される。

調査のまとめ

縄文時代 新林遺跡を含む上高野原地区の縄文時代遺跡において、検出される遺構のほとんどが、陥穴で、住居跡が検出されない傾向にあった。その中で、唯一、中期あるいは前期の住居跡が検出されるのが、新林遺跡であった。今回、新林遺跡において縄文時代の陥穴が検出されたのは、e地点の調査成果と言えよう。上高野原地区の陥穴については、新林遺跡の北方に位置する上谷津台南遺跡での検出例が4例あり、上谷津台南遺跡と新林遺跡との中間に位置する、稲荷前遺跡、二重堀遺跡等では陥穴は検出されなかった。今回の検出例により、縄文時代の狩場としての新たな領域が検出されるかもしれない。今後も資料を増やしながら分析していきたい。

近世 今回の調査では、調査区北側において同規模、同形態の土坑を規則的に並んだ状態で5基検出した。用途は落とし穴であるが、一見すると縄文時代の陥穴（いわゆるTビット）と類似する。検出状況が、同規模、同形態の土坑が規則的に並んだ状態であったこと、これら土坑群と平行する状態で溝を検出できたことから近世のシシ穴と判断した。土坑群と溝の検出状況については、隣接するa地点においても同様であった。八千代市においてシシ穴を報告するのは今回が初めての例になり、近隣においてもその全容が調査された例は少ない。近世のシシ穴の用途については、害獣から農作物の被害を防ぐ為に造られたと考えるのが一般的であり、その際に、溝あるいは堀、野馬土手等と有機的な関連が有ることが指摘されている。今回もそうした例に漏れず溝とシシ穴列が関連している状況を調査することができた。シシ穴列は近世の土地利用の状況、更には近世村落の景観復元の手掛かりともなる資料と成りうるだろう。今後も資料を蓄積し考察を重ねたい。

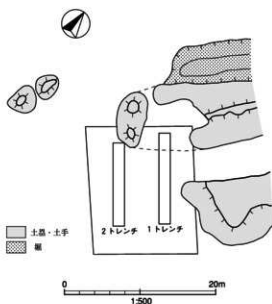
参考文献

- 半澤幹雄 1996 『東金市ラフサ野遺跡のシシ穴列』、『研究連絡誌』第45号 財団法人千葉県文化財センター・財団法人印旛都市文化財センター
 1991 『神楽塚遺跡・五反目遺跡』
 柏市教育委員会 1994 『柏市埋蔵文化財調査報告書』24

2. 高津館跡 c 地点



第6図 高津館跡位置図 (S = 1: 5000)



第7図 高津館跡c地点トレンチ配置図

遺跡の立地と概要

高津館跡は、堀込、根古屋等の地名が近隣に残っている点や堀や土塁が遺存していることから中世武士の居館跡として周知されている。遺跡の立地は、西から東側に緩やかに傾斜して下がる台地上で標高15~16mの傾斜面に位置している。館の規模は南北90m 東西60mとして想定されている。西側隣接地においてa地点(註1)、b地点として2箇所の発掘調査が実施されているが、館跡にかかわる遺構・遺物は検出されなかった。

調査の方法と経過

発掘調査は、工事実施区域の形状に沿って2本のトレンチを設定し、遺構の確認に努めた。また併せて調査区周辺の土手、土塁、堀の現況測量を実施した。

調査経過は、平成11年4月18~20日現況測量、25~27日重機によるトレンチ掘り下げ、4月27日~5月1日重機後のトレンチ内精査、5月2~7日トレンチ土層断面図作成、器材撤収、埋め戻しにより調査を終了した。

調査の概要

本跡は低位段丘面に位置しているため、ローム層下に粘土層、砂層の自然堆積が見られる。ローム層上に褐色土主体で白色砂質粘土、ロームブロック、黒色土を混入する層が3層みられた。厚さは90cmを越えている。いずれも非常に締まっており、人為的埋め戻しによる堆積と考えられる。点に近い調査のため断定できないが、大がかりな地業遺構の可能性が考えられる。

遺物は1トレンチから縄文土器(中期加曾利E式)1点と奈良・平安時代土師器片2点が出土しているのみで中世にかかる遺物は出土しなかった。

調査のまとめ

今回の調査においても、高津館跡の性格を把握することはできなかった。東側近接地の高津新山遺跡では、地下式坑が数基検出されており中世の遺構群が展開していることがわかっている(註2)。今後近接地の発掘調査による堀やその他の遺構の検出による資料の蓄積を待ちたい。

(註1) 八千代市史編さん委員会 1979 『八千代市の歴史』155~159頁 八千代市

(註2) 八千代市教育委員会 1983 『千葉県八千代市高津新山遺跡 昭和57年度確認調査の概要』

3. 新東原遺跡

遺跡の立地と概要

新東原遺跡（遺跡番号 259）は地域の南東部の佐倉市との市境、新川の支流である勝田川の支流を東に望む、台地上に所在する。遺跡の広がりは台地上平坦部に主体をおくものの、斜面部や低台地にも及んでいるものである。台地平坦部は24m、斜面部は24-20m、低台地は20-17m、旧水田面は16m以下と捉えられている。台地上と水田面との比高差は約8mである。

遺跡は標高24mの台地上に主体をおくものと考えられるが、周辺の遺物分布状況から縄文時代後期・加曽利Bと奈良・平安時代に主体をおくものと捉えられてきた。勝田及び勝田台地区が広がる台地中央部は勝田台団地の造成により、遺跡の存在が推定しがたいが、台地縁辺には縄文時代から中世にいたる各種の遺跡が確認されており、本遺跡もそのひとつであるといえよう。

調査の方法と経過

新東原遺跡としては初めての調査であるため、確認調査地区をa地点と呼ぶこととした。調査対象地は大きく台地上平坦面と斜面部、そして旧水田面に分かれていた。

また、現状は隣接地から隠すように対象地の外淵はシノダケが密生し、台地平坦部は緑肥準備のための草地となっていた。一方、斜面部は林地となり、斜面部の下の平坦地は雑草の繁茂とアスファルトや砂利が敷かれていた。このため、表土除去は重機によって行うこととし、その後には遺構確認に努めることにした。

調査は対象地の地形や樹木等の周囲の状況に沿って、任意のトレンチを設定して行うこととした。特に斜面部は樹木の伐採ができなかったため、樹間をぬっての設定となった。このため、斜面部は不定方向のトレンチ設定となっている。

確認調査は平成13年6月2日から7月4日にかけて行われ、6月2日に低台地と想定された地区にトレンチを設定し表土除去を行った。その後、台地上平坦部及び斜面部に対してトレンチによる遺構確認を行い、セクション図及びトレンチ設定図等の測図作業、写真撮影等の記録を行った。また、7月4日は、再度、重機による埋め戻し作業を行い調査を終了した。

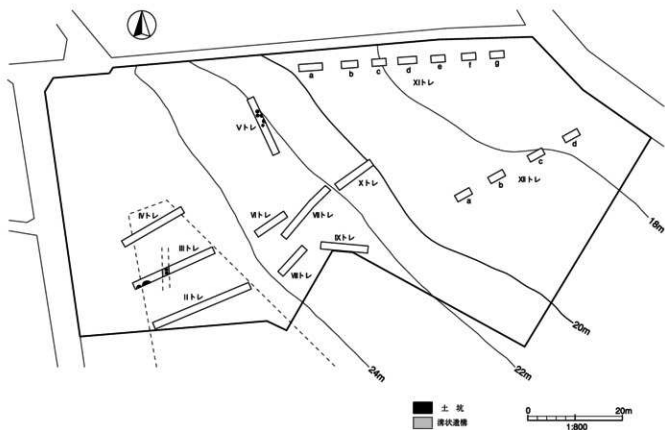
調査の概要

斜面部下の旧水田面は雑草が繁茂し、地形が観察しづらいものであった。勝田川流域には千葉段丘面である低台地がいくつか所在しており、本地区もその一部ではないかと想定された。しかし低台地として捉えられている標高20-17mについては全てが台地を構成するものとは考えられず、沖積面との境界を確認するために2列のトレンチを設定し表土を除去した。その結果、約1m程度掘り下げてもローム層を確認できず、建築廃材等の瓦礫が多量に埋められており表面に薄くやや良質な土がかぶされていたものであった。このため、当初、低台地として捉えた地区は水田面として捉えなおし、その状況を写真に記録するにとどめた。

台地上平坦部は3本のトレンチを設定し遺構確認を行ったが、表土耕作用とローム層の2層に単純に分層できるものであった。表土層からは2度にわたる深耕が窺え、近代以降の所産と捉えられた土坑と溝状遺構が確認された。ロームはソフトロームを主体とするが、一部ハードロームが認められる等の深耕の影響が窺えた。



第8図 新東原遺跡位置図 (S = 1: 5000)



第9図 新東原遺跡遺構検出状況図

斜面部においては各トレンチとも谷に流入するように次第に腐食土層の厚みを増し、やや複雑な堆積を示していた。そして水田面との境界は、標高 22~20mの地点においてを確認した。

遺物は、トレンチにおいて加曾利Bの小破片が出土したのみであった。遺構は、トレンチにおいて5基の土坑を検出した。遺物は確認できなかったが遺構確認面はソフトロームであり、また、上層は自然堆積していることから、縄文時代の所産と判断した。

調査のまとめ

新東原遺跡a地点の確認調査の結果、縄文時代の土坑5基が検出され、また、縄文時代後期・加曾利Bの土器片が若干出土したにすぎないが、台地上平坦部と斜面部のそれぞれ一部について、本調査の対象範囲として捉えられた。今回の確認調査が、本遺跡の初めての調査であり、土器分布等の表面観察から想定していた遺跡の性格を一部追認した形になったが、当該期のみの遺跡であるのかは判断しなかった。他の時代の遺構等については今後の調査の進展にたよるところが大きいといえよう。

新川上流には千葉段丘面とされる低位段丘がいくつか報告されているが、勝田川と新川の合流付近の勝田側にも勝田前畑遺跡が存在している。土器分布の表面観察では縄文時代早期・夏島式と後期の土器片が採集されており、また、勝田川中流にある千葉市内野第遺跡でも縄文時代後期から晩期、古墳時代の集落跡が調査されている。このことから新東原遺跡の20~17mの低位面も、現状の観察からその存在を想定したが、人為的な埋土と捉えられ地形の改変が大きいことを知ることができた。本遺跡の東に入り込んだ谷津は勝田川の支流であるが、水源地としても存在していたと思われ、現状の谷津よりはやや広いものであったことが窺われる。

いずれにしても新東原遺跡の確認調査で、八千代市の原始・古代の姿の一端が捉えられたと思っている。

なお、本対象地の照会では「病院建設」を前提としていたが、開発行為の計画立案は具体的にはなっていない。このため「埋蔵文化財の取り扱いについて」は、今後、事業の具体化した段階で協議をもつこととなっている。

4. 上高野大山遺跡

遺跡の立地と概要

上高野大山遺跡（遺跡番号 225）は、市域の東部の上高野地区に所在する。佐倉市との市境を流れる高野川から入り込む谷津を北に望み、その谷頭付近に立地している。現状は畑地であり、平坦な台地上に所在する。標高は24～25mである。

本遺跡は奈良・平安時代の遺跡として捉えられており、隣接して同時代の笹堀遺跡等も所在している。周辺には散布はうすいが土師器片が確認されており、周知の遺跡として捉えられているものであった。

調査の方法と経過

今回の確認調査は上高野大山遺跡として捉えている範囲内での初めての調査であり、調査地点をa地点と呼称することとした。当該地は現状が畑地であり、また、対象面積が490.6㎡とやや狭小であるため、当該地の形状にあわせて4本のトレンチを任意に設定し、遺構確認に努めることとした。

調査は平成13年7月18日～23日にかけて行った。任意のトレンチ設定後、表土除去と遺構確認を行い、トレンチ北壁際において基本土層の確認と旧石器時代の確認調査を行った。その後、基本土層やトレンチ設定図の測量や写真撮影等の記録作業を実施し、トレンチの埋め戻しを行って調査は終了した。

調査の概要

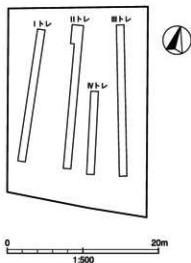
調査はおおよそ南北に設定した任意のトレンチの表土除去を行った後、遺構確認に努めることとした。表土除去は重機によって行い遺構確認に努めたが、天候が極めてよく雨も降らなかったため、表土除去後のトレンチは乾燥が著しく、遺構確認作業は散水作業を繰り返しながら行った。

現状は畑地のため基本土層は、層表土耕作土（平均15m）、層ソフトローム層の2層に単純に分層ができたが、耕作によって一部ローム層が失われていた。しかし慎重に遺構確認作業を行ったが、遺構は検出できなかった。遺物は、トレンチの北側から表土層下部に2点の土師器破片が出土し、西側に一部トレンチを拡張してその広がりを捉えようとしたが、出土した以外には遺物は検出されなかった。また、トレンチ北壁際をハードローム中位まで下げ、基本土層と旧石器時代の確認作業を行ったが、該期の遺物や痕跡は検出できなかった。

調査では遺構は検出されず、土師器破片が2点出土したのみの結果であった。想定された奈良・平安時代の遺物が出土したことは、上高野大山遺跡の形成時代の一部を捉えられたと考えている。確かに表面観察によっても遺物の散布はうすい対象地でもあったが、遺物の出土によって本遺跡の広がり的一端を捉えられたといえよう。



第10図 上高野大山遺跡位置図（S = 1: 5000）



第11図 上高野大山遺跡トレンチ配置図

5. 逆水遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

逆水遺跡は、市域中央を流れる新川を北に臨む舌状台地縁辺に近い平坦面に立地し、標高は約23m、台地と水田面との比高は約18mである。近隣の遺跡として本遺跡南東に烏ヶ谷遺跡がある。逆水遺跡のこれまでの調査として平成8年にc地点南西のa地点(当時の名称としては逆水西遺跡)の調査があり、弥生時代後期の竪穴住居跡、中世の土壇墓等を検出している。また同じく平成8年には、c地点北方のb地点の調査も実施されており、弥生時代中期の方形周溝墓6基、時期・用途不明の土坑・溝等を検出している(註1)。今回の調査区の現況は、本来、山林であったが、調査開始時には既に土取りがされていて、荒蕪地と化していた。

調査の方法と経過

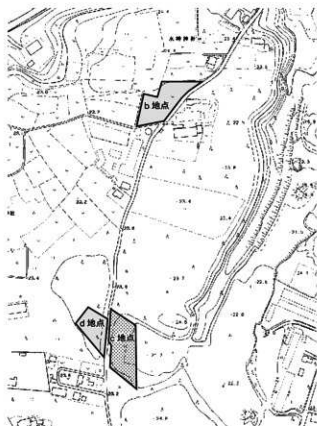
調査は調査区の形状に合わせて5m 5mのグリッドを設定し、その区画を基に2m 4mのトレンチを10m間隔で配置し遺構の確認に努めた。また、現況で既にロ-ム面が露出し、遺構が確認出来ない地点については、敢えて、トレンチは設定せず、それ以外の地点について、必要に応じてトレンチの増設・拡張等を行った。

調査期間は、平成13年8月16日～同年8月23日である。8月16日に機材搬入及び下草刈り等の環境整備、遺物の表面採集を行う。8月17日に調査前現況写真撮影を行い、グリッド設定に着手する。8月20日グリッド設定を終了し、人力による表土除去作業及び包含層調査を開始する。8月21日から包含層調査と平行して重機による表土除去作業を行う。同日には包含層調査を終了し、遺構確認作業に着手する。8月22日に遺構確認作業が終了し、写真撮影等の記録作業を行い、機材撤収を行い調査の全工程を終了した。

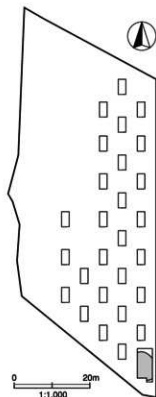
調査の概要

本遺跡の基本層序は、表土、ソフトロ-ム層であった。遺構確認作業は、層上面で行った。その結果として、調査区南側で弥生時代後期の竪穴住居跡1軒を検出した。遺物に関しては、遺物包含層は検出されず、住居跡を検出したトレンチ及びその周辺トレンチから弥生時代後期の土器片が少量出土した。所謂、印手系と呼ばれるもので、検出された住居跡に伴うものと考えられる。以下、代表的な出土遺物について若干の説明を行いたい。

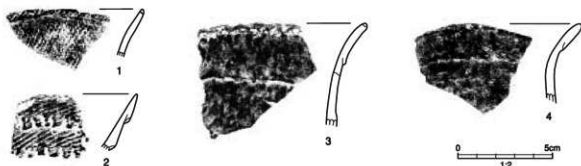
1～4はいずれも弥生時代後期の裏形土器の口縁部片である。1は単純口縁で色調は黒褐色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。口縁部に附加条縄文を施し、口唇にも同様に附加条縄文を施す。2は折り



第12図 逆水遺跡位置図 (S = 1: 5 000)



第13図 逆水遺跡 c 地点遺構検出状況図



第14図 逆水遺跡c地点出土遺物

返しによる複合口縁で色調は黒褐色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。口縁部に附加条縄文を施し、折り返し部下端に棒状工具による刺突をめぐらす。3も折り返しによる複合口縁である。色調は黒褐色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。口縁部については無文で口唇部に刻みを施している。4も折り返しによる複合口縁であるが無文である。色調は橙褐色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。1～4のいずれも弥生時代後期印手系の所産である。

調査のまとめと若干の予察

今回c地点の調査で検出されたのは弥生時代後期の竪穴住居跡1軒に止まったが、調査時に既に土取りがされていたことと、c地点に隣接するd地点(平成14年度調査・現在整理中)においても弥生時代後期の住居跡が2軒検出されていることを踏まえると、本来、相当数の竪穴住居跡が存在していたことが想定される。

逆水遺跡は、東西を樹状状に開析された小支谷で区画された北へ突出した舌状台地に所在し、今回を含め4地点の調査が実施された。これら4地点の成果から逆水遺跡における弥生時代のまとめと若干の予察を試みたい。まず、b地点であるが、b地点は台地の先端部から少し奥まった平坦面に位置し、この地点からは、弥生時代中期宮ノ台期の方形周溝墓群が検出されている。そして舌状台地のやや奥まった東西の両端部に位置するa地点、今回のc地点、現在整理中のd地点の3地点では弥生時代後期の集落が展開している。つまり、台地先端において弥生時代中期の遺跡が先ず出現し、後期に至ると台地の奥まった部分に集落を展開していく状況が看取されるのである。ここで注目したいのが、逆水遺跡の東方約1.5kmに位置する粟谷遺跡である。粟谷遺跡も逆水遺跡同様に、印旛沼を北東に臨み南北を小支谷で区画される舌状台地に立地している。粟谷遺跡についても現在整理中であるが、遺跡の展開としては台地の先端に宮ノ台期の集落が展開し、やや奥まった地点に同時期の方形周溝墓群が検出されている。更に台地の奥まった南北の両端部に弥生後期の集落が展開している。粟谷遺跡と逆水遺跡とは、遺跡の立地する地形的特色と遺跡の展開が類似している。このことは恐らく偶然ではなく、八千代市を含めた印旛沼沿岸域に弥生文化が波及し浸透していく状況を反映しているのではないだろうか。印旛沼水系による文化的及び政治的なネットワークと谷津田の経営とが、必然的にこのような集落展開を歩ませるのではないかと考えている。逆水遺跡における宮ノ台期の集落は、未だ検出されていないが、宮ノ台期の集落が所在すると思われる台地先端部也未調査である。該期の集落が検出される可能性は高いと思われる。

今回の調査地点は調査時には既に土取りが行われていたが、逆水遺跡が所在する地区は、近年に至っても大規模な開発が行われず、遺跡全体の遺存状況は良好だと思われる。今回の様な小規模な調査を積み重ね、八千代市のみならず近隣の周辺遺跡との比較検討を試みながら逆水遺跡の更に詳細な分析に進んでいきたい。

(註1) 八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告 平成7年度』
八千代市教育委員会 1997 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』

6. 高津中村遺跡

遺跡の立地と概要

高津中村遺跡（遺跡番号 237）は市域の南西部、高津地区に所在する。新川の上流である高津川を北に望みながら、高津川に対して台地平坦部から緩斜面を広がる遺跡である。標高は18～16mであり、水田面との比高差は約2mである。

本遺跡は、奈良・平安時代の土師器片の散布によって認められた遺跡である。また、遺跡が所在する同じ台地の南東部には中世の高津館跡が所在し、高津川の分流を東に挟んで奈良・平安時代の集落跡を主体とした高津新山遺跡が所在している。

調査の方法と経過

今回の確認調査の対象地は地図上から水田面に突出した低台地として捉えられたものであり、しかも照会に対しての現地踏査の折り、隣接した周辺において土師器片を確認していた。このため確認調査を実施することとしたが、高津中村遺跡に対しての調査は初めてであり、本調査地点をa地点と呼称することとした。

調査は平成13年8月20日～31日に行った。重機による表土除去と遺構確認を行った後、調査トレンチ等の測量と写真撮影を行い終了した。なお、雨天によりトレンチの埋め戻しは8月31日にずれ込んだが、無事終了することができた。

調査の概要

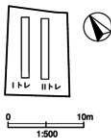
当該地は標高15.5m前後を測る畑地であったが、対象面積が214㎡とやや狭小であるため、土地の形状にあわせて南北方向に2本のトレンチを任意に設定し、遺構確認に努めることとした。表土は重機による除去を行ったが、想定した深さより高い段階でローム層が一部に検出された。場所によっては全体的にロームが動かされた痕跡が認められたために、深さ約1m迄、数度にわたって遺構確認を繰り返しながらロームを除去することとした。しかし1mをこえてもロームが人の動きによって振動しており、また、深く現代のゴミ等も混じり、ゴミ混入層と分層もできなかったため、再堆積したロームであり、谷部分を埋めたものと判断した。そしてトレンチ設定図の測量および発掘状態の写真記録を行い、調査を終了した。

調査のまとめ

確認調査は、水田面に突出した千葉段丘面に所在する遺跡を想定したものであったが、残念ながら遺構も確認できず、また、千葉段丘面も検出できず、当該地は水田面を埋め立てた畑地としたものであることが確認できたのみであった。低台地の突出と想定したことは各種の地形図等を参考にしたものだが、対象地の北側の旧道部分までが台地であることが捉えられたことは、高津中村遺跡の広がりを考える上で新たな知見を与えてくれたといえよう。



第15図 高津中村遺跡位置図 (S = 1: 5000)



第16図 高津中村遺跡トレンチ配置図

7. 白幡前遺跡b地点



第17図 白幡前遺跡位置図 (S = 1: 5000)

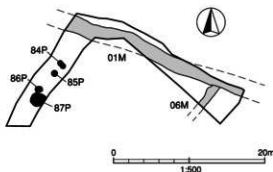
遺跡の立地と概要

白幡前遺跡は、萱田地区の新川西岸を見下ろす標高約15～20mの台地上に位置する。遺跡の北東から南西に入り込む谷津を隔てた北側に井戸向遺跡が対峙する。昭和5年以降萱田地区土地区画整理事業に先行して、財団法人千草県文化財センターによって発掘調査が実施されてきた。白幡前遺跡については、そのほぼ全域(東側隣接で同一遺跡と想定できる上の台遺跡を除く)を昭和54～63年にわたって調査が実施された。その結果、旧石器時代ブロック56か所、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の竪穴住居跡5軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡15棟他の遺構が検出されている。今回の調査は、区画整理事業区域の東側隣接地区において、事業者単独事業として共同住宅建設が予定されており、その施工区域外にあたる事業主宅と工事区域の境界に擁護壁を設置するため発掘調査を実施することとなった(註1)。

調査の方法と経過

調査区はL字状で幅3～4mの狭い範囲のため、バックホウによるバケット幅を基本としたトレンチを設定し、随時拡張して遺構確認に努めた。

調査期間は平成19年9月17～21日で、バックホウによる表土剥ぎ後に、1日遺構プラン確認作業、18・19日遺構掘り下げ、20・21日遺構平面図作成後、現場撤収作業により調査を終了した。遺構調査については、遺構プラン確認作業において土坑群と溝状遺構としての性格を把握できたので、本調査扱いとして確認本調査に切り替えて実施した。



第18図 白幡前遺跡b地点遺構配置図

調査の概要

本遺跡の基本層序は、後世の整地により削平を受けているため、表土下30～40mにおいてソフトローム層になっている。このため、縄文時代以降の遺物包含層は消失しているかもしくは存在しない。遺構覆土内での遺物の出土も認められなかった。

調査の結果、奈良・平安時代の土坑4基と時期不明の溝状遺構2条を検出した。

土坑は、84～87Pである。84Pは1.2m×0.7mの楕円形で深さ0.2mである。2口のピットからなっており、掘立柱建物跡の掘り方の可能性が高い。覆土は暗褐色土～褐色土で、人為的な埋め戻しの堆積状態を示している。85Pは0.78m×0.75mの円形で深さ0.14mである。覆土は黒褐色土～暗褐色土で、やはり人為的な埋め戻しの堆積状態を示している。86Pは1.03m×0.76mの楕円形で深さ0.19mである。覆土は暗褐色土～褐色土で、人為的な埋め戻しの堆積状態を示している。87Pは遺構が調査区域外に延びているため全容ではないが、1.82m×1.2m以上の隅丸長方形を想定できる。覆土は黒褐色土である。

溝状遺構は01Mと06Mを検出した。01Mは本遺跡a地点において調査中である。b地点はその東側にあたる。01Mの規模は、幅1.9mで断面は台形状である。壁面の立ち上がりは緩い角度をもっている。覆土は黒褐色土の自然に埋まった土層堆積を示している。06Mは01Mに直交する状態で検出された。規模は、幅1.1mで断面は台形状である。壁面の立ち上がりはきつい角度をもっている。覆土は暗褐色土を主体としている。01Mにきられており、時期は古い。溝の性格は、01Mが現存する層に沿った状態で巡っていることから、屋敷の境界を画するものと想定される。06Mについては溝自体が一部であり、詳細については不明である。

調査のまとめ

今回の調査においては、非常に狭少な面積のみの成果であり、屋敷側は切土されていることは明らかである。そのため、南側の遺構展開については全く不明である。現在、本調査を実施しているb地点西側のa地点においては、奈良・平安時代の竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡6棟、土坑3基等が検出されている。これら一連の遺構群が西側に展開することは明瞭である。b地点の土坑群にしても、掘立柱建物跡の掘り方としての性格が考慮されるところである。

(註1) 重田の岩井氏を事業主とする共同住宅建設に先行した発掘調査事業である。対象面積1498㎡について平成13年5～9月にかけて発掘調査を実施した。現在整理中で報告書未刊行だが、発掘調査終了時の成果については調査のまとめの項に示した。

参考文献

財団法人千歳県文化財センター 1991 『八千代市白幡前遺跡 - 重田地区埋蔵文化財調査報告書 - 』

8. 作山遺跡

遺跡の立地と概要

作山遺跡は、市域北西部に位置し、北側では神崎川を隔て白井市に、西側では鈴身川を隔て船橋市に隣接している。水系では北側の神崎川に属し、標高18～21mの台地上平坦部に位置している。水田面との比高差は14～17mである。

本遺跡内での調査例はないが、今回調査区の西側で小池更生園との間に、南北方向の林道がある。この北側部分で道路拡幅の計画が予定された平成7年度に試掘を実施した。この際には、遺構・遺物ともに未検出であった。また、周辺地区の調査例では、平成17年度に本遺跡南東にあたる妙正神遺跡において、確認調査が実施され、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡や周溝墓と考えられる落ち込みを確認している（註1）。

今回調査区周辺の現地踏査では、奈良・平安時代の土師器・須恵器を採集しているほか、周知の遺跡である作山塚群において、旧道沿いに塚を4基確認している。

調査の方法と経過

調査区は立木や下草繁茂、その他障害物等があったため、調査環境整備後に可能な範囲内で幅2mのトレンチを任意に設定して遺構の確認に努めた。また、落ち込みの性格を明確にするため、適宜拡張してプランを確定していった。

調査期間は平成17年9月2日～同年10月9日で、9月2日環境整備及びトレンチ設定、26～28日トレンチ手掘り、10月2～3日バックホウによるトレンチ掘り下げ及び落ち込み部分拡張、平行してトレンチ内遺構プラン精査作業、4～5日遺構調査で、01～04P半截、01M・01Eクッション実測、遺構平面図作成等を経て、9日をもって調査にかかる全作業を終了した。

調査の概要

調査区内は、牧畜関連の施設や一部牧草地だったので整地のための切土が著しかった。遺構確認面は表土（客土）下40～60mの層下部分～層で、縄文時代以降の遺物包含層は確認できなかった。

調査の結果、中世以前の周溝状遺構1基、中世土壇3基・火葬施設1基、時期不明溝1条を検出した。

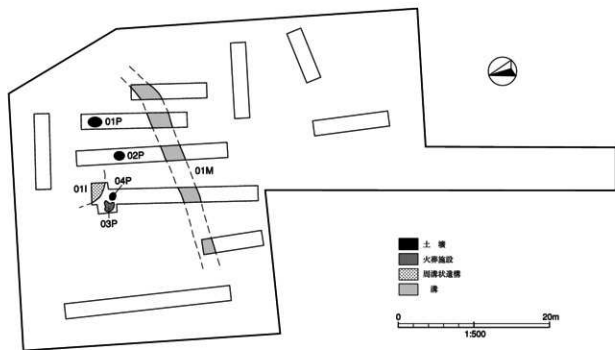
周溝状遺構は01Eで、断面皿状で壁面は緩やかに立ち上がっている。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で締まっている。遺物は出土しなかった。

中世土壇は01P、02P、04Pである。01Pは長軸11mの長方形で深さは0.6mである。覆土はロームの埋め戻し土を主体とした層で、ぼそぼそしている。遺物は出土していない。02Pは円形で深さ0.4mである。覆土は焼土粒・炭化粒混じりの暗褐色土とロームの埋め戻し土である。遺物は出土しなかった。04Pは0.9m×0.6mの不整長方形で深さは0.4mである。覆土は焼土粒混じりの暗褐色土とロームの埋め戻し土である。遺物は白磁と考えられる多角形の破片が1点埋め戻しローム層から出土している。

火葬施設は03Pである。本土坑は長方形と楕円形のピットの組合せによりT字状の平面形をもっている。規模は長方形部分が0.9m×0.5mで深さ0.25m、楕円形部分が0.7m×0.4mで深さ0.15mである。全長1.35mの規模を



第19図 作山遺跡位置図 (S = 1: 5000)



第20図 作山遺跡遺構検出状況図

もつ。長方形側のピットから炭化材が出土したのみで、骨や歯等の遺物は痕跡も見られなかった。

時期不明の溝は、01Mである。確認調査区北側を東西方向に走っている。確認した範囲は、23m以上にわたって遺存している。上幅255m、下幅07m、深さ07mである。壁面は南側でやや角度をもって立ち上がっている。北側は、南側よりやや緩やかな立ち上がりを示している。覆土はロームと黒色土を混合した暗褐色土を主体とした土層である。遺物は出土しなかった。

遺物は白磁の多角環以外では、弥生土器の小破片が出土している。

調査のまとめ

調査において、本遺跡が中世～近世初頭の墓地としての性格をもつことが判明した。なお、本調査については今回の範囲を含めた450㎡について平成14年1月～2月に実施している。詳細な成果については、平成15年3月に稿を改めて報告することとする。ここでは、本遺跡について考慮すべき点を挙げてみたい。

01Mと土壌群は同時期に造られたものか否かについて

溝に囲まれた共同墓地として考えられないだろうか。または台地整形遺構・地下式墳・粘土貼り土坑・T字型火葬施設等中世遺構がセット関係として発掘調査で検出されているが、性格の相違を引き出せないだろうか。

01P・02P・04Pと03Pの形態の違いについて

土壌とT字型火葬施設（ないし墓）の分布は寺院の宗派と関係はないだろうか。火葬施設と土壌の割合に規則性はないだろうか。火葬施設と火葬墓の明確な使い分けは存在するのだろうか。

以上、雑駁ではあるが考慮すべき点としてあげた。

〔註1〕八千代市教育委員会 2000 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』

9. 内込遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

内込遺跡（遺跡番号 246）は、市域の南西部の八千代台北地区に所在する。新川の上流である高津川を北に望みながら、高津川に対して緩く傾斜した台地に広がる遺跡である。また、台地の西側は現在は埋め立てられているが、かつては浅い谷津が入り込んでいたところであり、このためやや急な斜面となっている。標高は16m前後であり、水田面との比高差は約4mである。

本遺跡は古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡として捉えられており、当該地の現状は畑地であるが、細かな土師器片が多く散布している。本対象地の隣接する東側は、古墳時代後期、奈良・平安時代の集落跡が所在した内込遺跡 a 地点であり、a 地点の本調査の今回対象地に入り込んで竪穴住居跡が検出されていた。また、本遺跡が所在する西には奈良・平安時代の集落跡を主体とした高津新山遺跡が所在している。

調査の方法と経過

今回の確認調査は内込遺跡の2度目の調査地点であることから、b 地点と呼称することとした。また、平成9年度の隣接地の内込遺跡 a 地点の調査（註1）による集落跡の検出から十二分に遺構検出が想定されることから、確認調査の主体は集落跡の広がりをおさえることに主体をおくこととした。

調査は、調査区南側の境界杭を基準として20m 20m方眼を設定し、北から南へA・B・Cとし、西から東へ・・と呼称し、20m区画内をさらに5 5mのグリッドを設けた。台地平坦部ではその北東列を2 4mのトレンチとして、10m間隔で南北方向を基準として調査した。また、西側の急斜面部では東西方向にトレンチを設定したが、いずれも遺構全体の展開を捉えるために、随意に設定したトレンチもある。

調査は平成12年12月7日～平成13年1月8日にかけて行った。当該地は、一部農家に貸与された畑地であり、家庭菜園としても貸し出されている所であった。また、周辺道路は狭小であるが児童・生徒の通学路として指定されたものであった。このため当初、表土除去の方法として重機の使用を検討していたが、搬送車の進入が困難なこと、また、児童・生徒の安全面を考慮して、人力による表土除去を行うこととした。12月7日には機材搬入や調査諸準備を行い、調査基準杭の設定、トレンチの発掘、遺構検出図の作成や写真等の記録を行った。機材撤収は平成13年1月8日に延びたが、無事終了した。

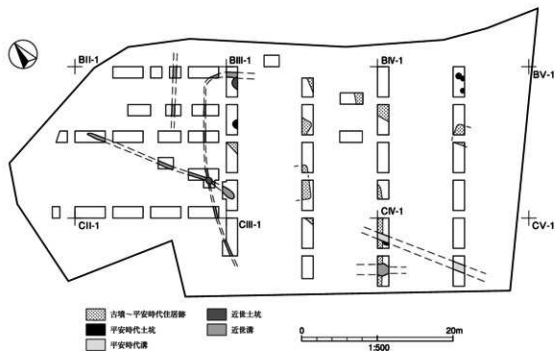
調査の概要

今回の確認調査の対象地は、東側地区の台地緩斜面と、西側の谷津に下る急な斜面部に大きく二分されるものであった。台地上緩斜面部の基本土層は2層に分かれ、層表土耕作土、層ソフトローム層となっている。畑地ということもあり基本土層がきれいに分層できるため、ソフトローム面を遺構確認面とした。また、調査区西側の急傾斜面は谷津に流れ込んだ自然堆積であり、黒色土と暗褐色土を主体としたものであった。

斜面部においては、土坑1基と谷津にむかって掘られた溝1条を検出し調査を行った。その他に検出した遺構は、調査区 区東側の台地緩斜面に広がっていた。そして竪穴住居跡6軒、土坑5基、溝状遺構3条等を検出した（註2）。確認された遺構の形状確認作業で出土した遺物は、古墳時代後期と奈良・平安時代の土師器が主体



第2図 内込遺跡位置図 (S = 1: 5 000)



第2図 内込遺跡b地点遺構検出状況図

であったが、器形を窺い知れるものは出土しなかった。

調査のまとめ

今回の確認調査は古墳時代から奈良・平安時代の集落跡の検出が想定されることから、竪穴住居跡等の遺構の広がりを捉えることに主眼をおいた。その結果、当該地の東側に位置する台地緩斜面を中心として、集落跡の範囲が捉えられた。また、トレンチ設定は行わなかったが、B - 9グリッド以東の境界地区には、内込遺跡a地点よりの竪穴住居跡の未調査部分が入り込んでおり、あえてトレンチを設定しなかった。遺構番号についてはa地点と隣接するために、今後の混乱を避けるためにa地点からの通し番号とした。

なお、この確認調査終了後に事業者との協議を重ねた結果、本調査もやむを得ないこととなり、平成19年2月より5月にかけて本調査を実施した。古墳時代後期の竪穴住居跡を中心に、縄文時代の土坑等が調査されているが、本報告に向け現在、整理を進めているところである。確認調査では西側斜面部に所在した土坑1基を調査しているが、遺構報告の重複を防ぐためここでは確認調査の概要についての報告にとどめ、竪穴住居跡等の遺構の詳細な報告は本報告に譲りたい。

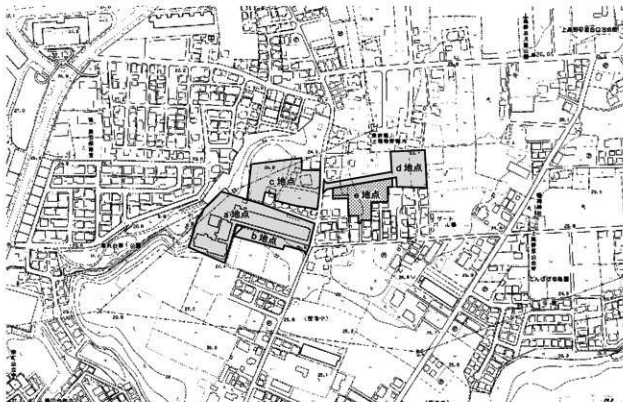
(注1) 内込遺跡a地点の調査については、以下を参照されたい。

八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書 平成8年度』

八千代市遺跡調査会 2001 『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書 - 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査 - 』

(注2) 確認調査ではB - 4グリッドからC - 1・2グリッドの西壁に沿って黒色土を覆土とする遺構を検出した。作物が未だ植えつけられていたためトレンチを拡張することができず、その形状を推定することができなかったため、竪穴住居跡と想定したが、本調査のあり1条の溝状遺構と判明した。遺構種別についての基数は、本報告をもって基準とした。

10. 二重堀遺跡e地点



第23図 二重堀遺跡位置図 (S = 1: 5000)

遺跡の立地と概要

二重堀遺跡は、市域の南部、新川の東岸にあたる辺田前の低地から東に延びる谷の台地上に立地し、台地東側は左倉市との市境を流れる小竹川によって樹枝状に開析された谷津によって区画されている。遺跡東方には縄文時代、奈良・平安時代を中心とする稲荷前遺跡が、さらに北西方向には同じく縄文時代、奈良・平安時代を中心とする上谷津台南遺跡等が展開する。二重堀遺跡のこれまでの調査では、平成5年度にa地点を調査し、縄文時代前期浮島期を中心として竪穴状遺構1基、土坑3基を、平成6年度に調査したb地点では縄文時代前期の土坑2基を、平成8年度のd地点では時期不明の溝1条と土坑1基を検出している。平成8年度に調査したc地点については遺構を検出するには至らなかった(註1)。今回の調査区域にあたるe地点は、d地点の南側隣接地にあたり、標高は約27mで、東側はほぼ平坦、西側は西へやや傾斜している地形である。現況は畑地であった。

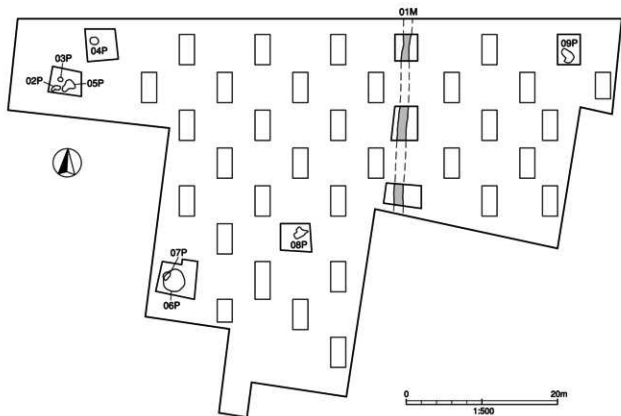
調査の方法と経過

調査は調査区の形状に合わせた5m 5mのグリッドを設定し、その区画を基に2m 4mのトレンチを10m間隔で配置し、遺構の確認に努めた。また、必要に応じてトレンチの増設・拡張を行った。

調査期間は、平成13年12月14日～14年1月2日である。12月14日に機材搬入等環境整備と遺物表面採集、現況写真撮影を行い、グリッド設定に着手する。12月17日にグリッド設定を終了し、人力による表土除去及び包含層調査を開始する。12月18日から包含層調査を終了し、重機による表土除去作業を行いつつ、遺構確認作業を開始する。12月2日にセクション調査及び先土器時代以前の下層調査に着手する。12月2日に年末のため作業を一時的に中断し、翌14年1月9日に調査を再開する。1月9日からセクション調査及び下層調査と平行しながら検出された遺構調査にも着手する。1月24日に遺構調査を終了し、完璧全景写真を撮影する。1月2日に機材撤収を行い調査の全工程を終了した。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、表土層、暗黄褐色土(新紀テフラ)層、暗褐色土層、暗黄褐色土、ソフト



第24図 二重堀遺跡e地点遺構配置図

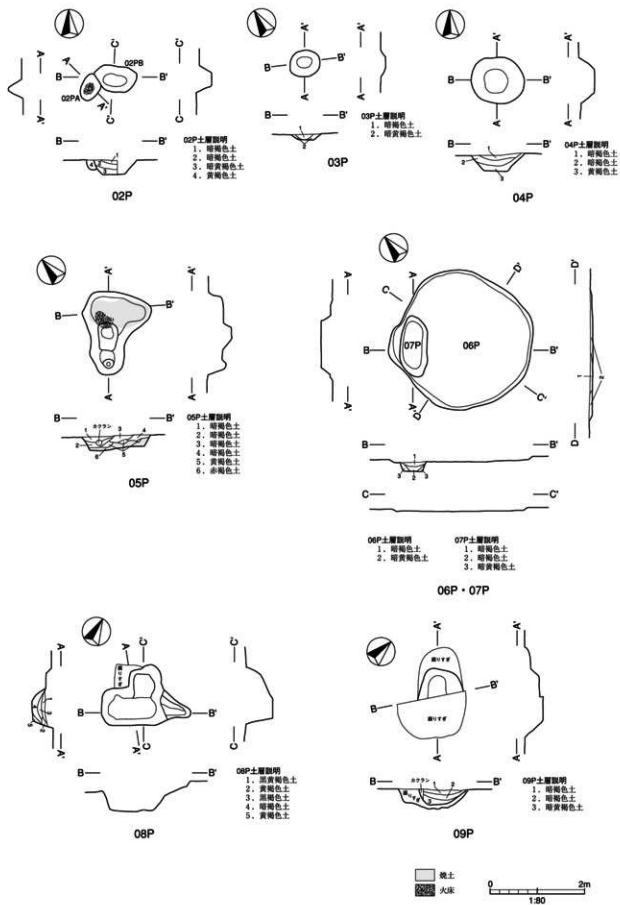
ロ - ム層、ハ - ドロ - ム層であった。調査区東側の平坦面においては後世の攪乱および耕作の為、層以下は直接ソフトロ - ム層となっており、新紀テフラ層以下を検出できたのは、調査区西側の緩斜面地からであった。遺構確認作業は、層上面及び層上面で行った。その結果としては、縄文時代の炉穴4基、土坑4基、時期不明の溝1条を検出した。また遺物包含層は検出されなかった。下層調査については層上面にて礫が1点出土し、出土トレンチを中心に5カ所20㎡の調査を実施したが、それ以外の出土遺物は無かった。以下、検出された遺構についての記述に移りたい。なお、遺構番号については、調査区がd地点に隣接しているため、土坑については続き番号の02Pから、溝については同一の溝のため同番号である01Mとする。

02P

調査区西側に位置し新紀テフラ層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。周辺の遺構として、03P, 04P, 05Pがある。2基の土坑が重複しており、プランは不整形を呈している。東側の土坑を02PA、西側の土坑を02PBとしたい。新旧関係は、土層観察からBが古く、Aが新しい。Bは楕円形のプランで長軸0.51m、短軸0.39m、確認面からの深さ0.33mであった。底部は狭く、壁は斜めに直線的に立ち上がり、円錐形の断面形状を呈する。Aも同じく楕円形のプランで長軸0.89m、短軸0.55m、確認面からの深さ0.33mであった。底部は、ほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がっていく。覆土は3層に分層され、自然堆積と考えられる。また、底部は、わずかであるが熱を受け赤化していた。遺物はA B共に出土しなかった。Aについては遺構の検出状況、規模・形態等から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

03P

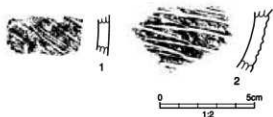
02P同様、調査区西側、新紀テフラ層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。不整形のプランで浅い窪み状の土坑である。長軸0.63m、短軸0.56m、確認面からの深さ0.09mであった。覆土は2層に分層され極微量であるが、焼土を含んでいた。おおむね自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。明確な熱を受けた痕跡は検出しえなかったが、02P同様、遺構の検出状況、規模・形態等から縄文時代早期の炉穴と考えられる。



第25图 二重裾遺跡e地点炉穴・土坑実測图

04P

02F同様、調査区西側、新紀テフラ層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。不整形円のプランでしっかりと掘り込みをもち、断面形は半球状である。長軸114m、短軸096m、確認面からの深さ033mであった。覆土は3層に分層され、最下層においては、微量の焼土が滲むように含まれていた。自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。02F同様、遺構の検出状況、規模・形態等から縄文時代早期の炉穴と考えられる。



第26図 二重堀遺跡e地点09P出土遺物

05P

02F同様、調査区西側、新紀テフラ層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。2～3基の土坑が重複し、プランは不整形を呈している。土層の観察からも2～3基の土坑が重複していることは確認できたが、個々のプランと新旧関係は明らかにしえなかった。最大長175m、それに直交するラインで136m、確認面からの深さ055mであった。覆土は6層に分層され、最下層においては、多量の焼土が検出されている。人為的な堆積と考えられる。遺物は出土していない。明確な火床を検出していないが、02F同様、遺構の検出状況、規模・形態等から縄文時代早期の炉穴と考えられ、数回にわたり、掘り返して使用されたため、結果的に不整形のプランになったと考えられる。

06P

調査区南西、表土層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。07Pと重複関係にあり、土層の観察から本土坑のほうが古い。不整形円のプランで浅いがしっかりと掘り込みをもつ。長軸320m、短軸280m、確認面からの深さ007mであった。底面はロ - ムの平坦な底面で、若干踏み固められた状況であった。壁は斜めに立ち上がる。覆土は暗褐色土系の土を基本的に2層に分層され、自然堆積である。遺物は出土していないが、覆土の状況、遺構の規模・形態等から縄文時代の小竪穴状遺構と判断した。

07P

調査区南西、表土層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。06Pと重複関係にあり、土層の観察から本土坑のほうが新しい。不整形円のプランでしっかりと掘り込みをもつ土坑である。長軸13m、短軸058m、確認面からの深さ027mであった。底面はロ - ムの平坦な底面で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土は暗褐色土系の土を基本的に3層に分層され、自然堆積である。遺物は出土していないが、覆土の状況、遺構の規模・形態等から縄文時代の土坑と判断した。

08P

調査区中央、表土層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。2基の隅丸長方形の土坑と1基の長楕円の土坑が重複し、プランは不整形を呈している。個々の新旧関係までは明らかにしえなかった。最大長188m、それに直交するラインで125m、確認面からの深さ047mであった。底部はロ - ムの平坦な底部で、壁は斜めに直線的に立ち上がっていく。覆土は5層に分層され、自然堆積である。遺構東側の長楕円の土坑部分については縄文時代の陥穴（所謂Tビット）の可能性も考えらるが、遺物が出土していないため時期・用途については、なお検討を要する。

09P

調査区東側、表土層の下、ソフトロ - ム層上面で検出される。不整形円形の掘り込みのしっかりとした土坑である。長軸146m、短軸104m、確認面からの深さ029mであった。底部は、ロ - ムのしっかりとした、ほぼ平坦な底部で、壁は斜めに立ち上がっていく。覆土は3層に分層され、自然堆積である。遺物については、覆土上層から縄文土器の小破片2点が出土している。出土遺物及び覆土の状況、遺構の規模・形態等から縄文時代後期の土坑と判断した。

01M

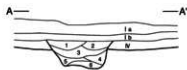
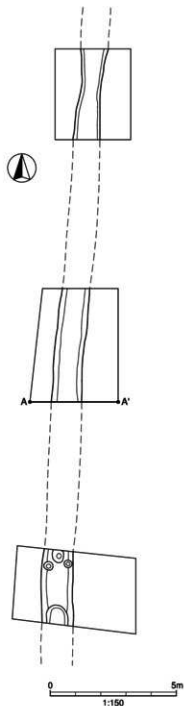
調査区東側、表土層の下、ソフトローム層上面で検出される。調査区を南北に横断し、d地点で検出された溝と同一の溝である。幅0.80~1.25m、確認面からの深さ0.35mの溝で底部はほぼ平坦。壁は斜めに直線的に立ち上がってゆく。硬化面は検出されていない。覆土は6層に分層され、自然堆積である。遺物は出土していない。時期・用途については不明である。

調査のまとめ

これまで二重堀遺跡で調査されたのは、縄文時代前期の遺構・遺物が主体となっていたが、今回のd地点では、縄文時代早期及び後期の遺構が検出された。早期の炉穴については、本遺跡が所在する上高野原地区では、本遺跡南東に位置する稲荷前遺跡について2例目の検出になる(註2)。また、調査区の西側隔で検出されたため、実際には、炉穴群として更に広がる可能性を秘めている。上高野原地区で検出される早期の遺構については、陥穴がそのほとんどであり、二重堀遺跡北西に位置する上谷津台南遺跡で4例、南西方向に隣接する本報告書掲載の新林遺跡e地点において1例、報告されている。これらは上高野原地区における縄文時代早期の狩猟の場を物語る遺構であり、それとは裏腹にこれらに対応する居住域が何処なのか常に問題となってきた。今回検出された炉穴や、稲荷前遺跡での例が、そのまま、これら陥穴の時期と同時存在するものか否かは、なお検討の余地が残されているが、居住域を想定させる遺構が検出されだしたのは、上高野原地区の縄文時代早期の様相を考える上で好資料を得たことになり、今回の成果と言えよう。また、今回、縄文時代後期の土坑が検出されたことも、当該地区での新しい所見であり、二重堀遺跡を含めた上高野原地区における縄文時代後期の新たな問題提起につながっていくだろう。今後、資料の蓄積をし、検討を重ねていきたい。

(註1) 八千代市教育委員会 1995 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』

(註2) 八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書』



01M土層説明	基本土層説明
1. 暗褐色土	Ia. 暗褐色土(表土層)
2. 暗褐色土	Ib. 暗褐色土(表土層)
3. 暗褐色土	II. 暗褐色土(新紀テフラ層)
4. 暗黄褐色土	III. 暗褐色土
5. 暗褐色土	IV. 暗黄褐色土
6. 暗黄褐色土	V. 黄褐色土(ソフトローム層)
	VI. 黄褐色土(ハードローム層)

01M

第2図 二重堀遺跡e地点溝実測図

11. 殿台遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

殿台遺跡は、佐倉市との市境を流れる小竹川に樹枝状に開析された舌状台地の平坦面に立地し、標高は約24m、水田面との比高は約13mである。近隣の遺跡として本遺跡北方に平沢遺跡があり、平成7年の調査においては弥生時代後期の竪穴住居跡を10軒検出している。また、本遺跡東方には、弥生時代後期の堂の上遺跡がある。殿台遺跡のこれまでの調査としては、平成6年から平成8年の間、断続的に調査が実施されたa地点がある。旧石器時代剥片、奈良・平安時代土師器片等が出土し、中世の井戸1基を検出している。今回の調査区の現況は竹林であった。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状・現況に合わせて2m×5mのトレンチを任意に設定し、遺構の確認に努めた。

調査期間は、平成14年2月2日～同年3月4日である。2月2日に機材搬入、現況写真撮影及び伐採等の環境整備を行う。2日、伐採に平行してトレンチの設定を行う。2日に人力による包含層調査及び重機による表土除去作業を行う。2日には包含層調査に引き続き、遺構検出作業を開始する。2日～3月1日の間、遺構確認作業のかたわら、写真撮影等の記録作業を行い、完照全景写真を撮影し1日に埋め戻しを行い、4日に機材撤収を行い、調査の全工程を終了した。

調査の概要

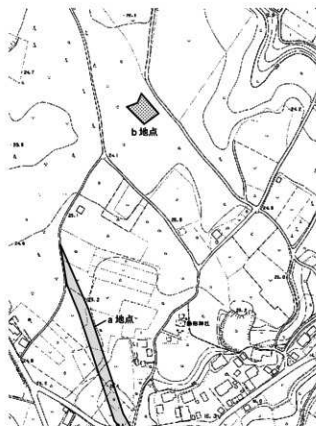
本遺跡の基本層序は、表土、黒褐色土層、暗黄褐色土（新紀テフラ）層、暗褐色土層、ソフトロ-ム漸移層であった。遺構確認作業は層上面で行った。その結果として、遺構は検出されなかった。また、遺物に関しても出土しなかった。

調査のまとめ

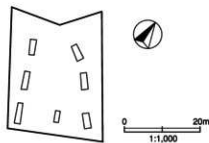
今回の調査では遺構、遺物を検出することができなかったが、これは、今回の調査区域が台地先端から奥まった地点であり、住居跡等が立地する条件を満たさなかったためであろう。本遺跡北方の小支谷を隔てた台地先端部にあたる平沢遺跡では弥生時代後期の住居跡が検出されており、平沢・殿台両遺跡が所在する台地縁辺部において相当数の弥生時代の集落が展開することが想定される。今回、遺構等は検出されなかったが、そうした集落の範囲等を考える上ではひとつの資料を得ることができたと思う。いずれにしても今後も資料の蓄積を行い、考察していきたい。

参考文献

- 八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版』
八千代市教育委員会 1997 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成7年度版』



第28図 殿台遺跡位置図 (S = 1: 5,000)



第29図 殿台遺跡b地点トレンチ配置図

12. 本郷台遺跡

遺跡の立地と概要

本郷台遺跡は、八千代市北西部、桑納川北岸の台地上に立地している。これまでに本郷台遺跡の調査例はなく、今回が初めての調査となる。調査区は、遺跡南端の桑納川に臨む小さな舌状台地で、台地平坦部の標高は21～24m、桑納川沿いの水田面との標高差は13～16mである。また、舌状台地先端の小谷津には弁才天を祀った小さな泉（弁天池）があり、現在でも湧水をたたえている。

調査区の現況は荒蕪地と山林であった。舌状台地平坦部のほとんどは重機による削土等により大きく地形の改変が行われており、その時の排土が平坦部南側に山状に盛土されている。現在はこの削土された部分が荒蕪地となっており、平坦部南側と台地斜面部が山林となっている。遺物の散布は舌状台地平坦部の削土された荒蕪地において確認することができ、特に舌状台地基部に位置する平坦部東端付近において多く確認することができた。確認された遺物のほとんどが縄文土器であるため、今回の調査においても該期の遺構の所在が想定された。

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて任意に10m方眼を組んだのち、これに平行する形で幅2mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの増設、拡張を行い遺構の捕捉に努めた。台地上平坦部を中心にトレンチを設定し、最終的に394mを掘削した。

調査期間は平成14年3月7～26日で、7日器材搬入、7～11日草刈り等環境整備、トレンチ設定、11～21日人力による表土除去作業、遺構検出作業、19～26日実測・撮影等記録作業、22～26日人力による埋め戻し作業、26日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

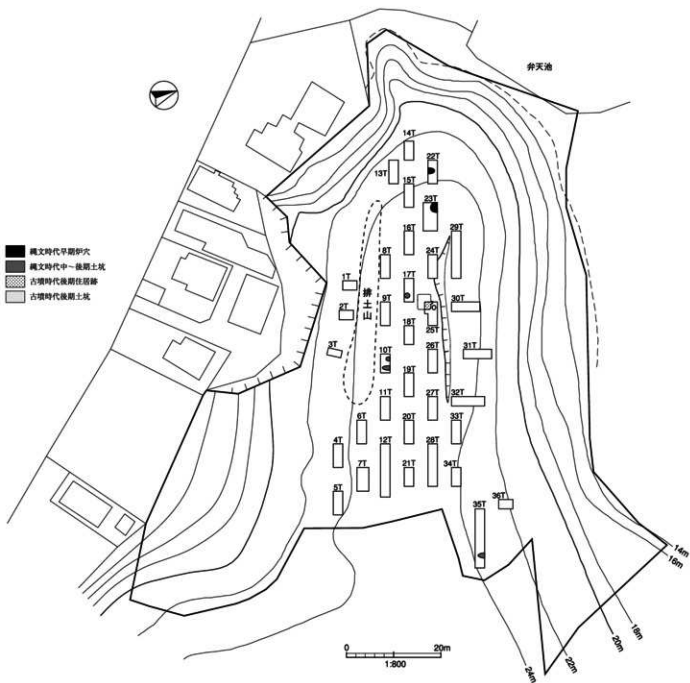
台地上平坦部のほとんどは重機による削土等により大きく地形の改変が行われている。斜面等の山林部においては旧地形が残っているが、荒蕪地となっている平坦部においてはほとんどが重機によりソフトローム層下位もしくはハードローム層まで削土されていた。また、ハードローム層まで重機で深掘りを行った後、埋土をして転圧されているところも多く、遺構の検出には苦労した。

調査の結果、遺構は縄文時代早期炉穴2基、縄文時代中～後期土坑4基、古墳時代後期住居跡1軒・土坑1基を検出することができた。古墳時代後期住居跡はカマドが検出されており、その位置から30m 30m程度の小型の住居跡と想定される。

遺物は、縄文土器（早・前・中・後・晩期）、弥生土器、古墳時代後期土師器、奈良時代須恵器の他、打製石斧、磨製石斧、礫などが出土している。遺物総数は96点で、うち縄文土器が898点で93%以上を占める。特に35Lよりの出土が多く、縄文土器898点中605点がこのトレンチより出土している。主体は中～後期のものであるが、これらの縄文土器は遺構に伴うものではなく、そのほとんどがトレンチ内の攪乱よりの出土である。なお、第3図に今回の調査で出土した主な縄文土器を掲載した。



第3図 本郷台遺跡位置図 (S = 1: 5000)

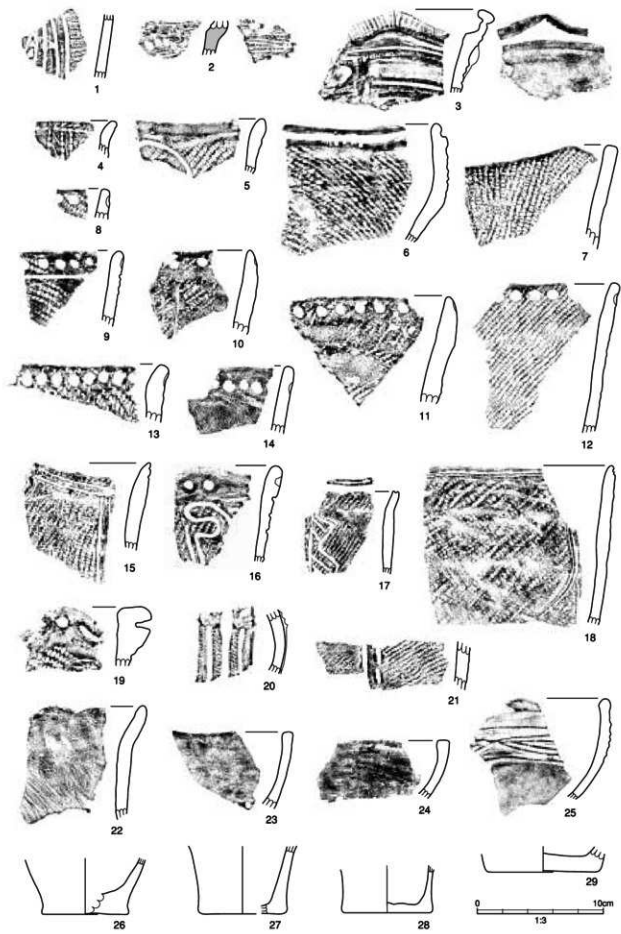


第3図 本郷台遺跡遺構検出状況図

調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代早期・中～後期、古墳時代後期の遺構を検出することができた。当初遺物の散布状況から縄文時代の遺構のみを想定していたが、古墳時代後期の小型の住居跡も1軒検出することができた。しかし、遺物量から考えると今回の調査区に関して主体となる時期は縄文時代中～後期であるといえよう。特に35Tからは、そのほとんどが攪乱からの出土というものの、中～後期を中心とした縄文土器が大量に出土している。35T周辺において該期の住居跡或いは遺物包含層の所在が想定されよう。

なお、本郷台遺跡は今回の確認調査の結果を受けて、平成14年度に約200m²について本調査を実施している。今後整理及び報告書作成作業を予定しており、確認調査を含む本郷台遺跡全体の詳細な成果については本報告にて行いたい。



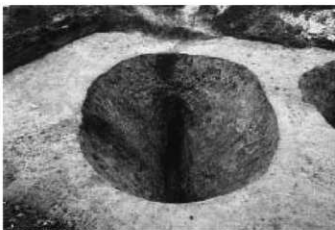
第32圖 本郷台遺跡出土遺物



(1) シシ穴列発掘状況



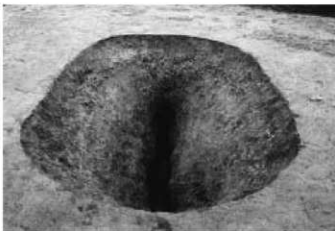
(2) 01P発掘状況



(3) 02P発掘状況



(4) 03P発掘状況



(5) 04P発掘状況



(6) 05P発掘状況



(7) 06P発掘状況



(8) 07M発掘状況



(1)土層断面



(2)調査風景



(3)調査前状況



(4)調査状況



(5)調査状況



(6)遺構検出状況



(7)調査風景



(8)調査状況



(9)調査風景



(1)調査状況



(2)住居跡検出状況



(3)出土遺物



(4)調査状況



(5)トレンチ完掘状況



(6)調査風景



(7)調査状況



(8)溝完掘状況



(9)土坑群完掘状況



(1)調査状況



(2)遺構検出状況



(3)調査状況



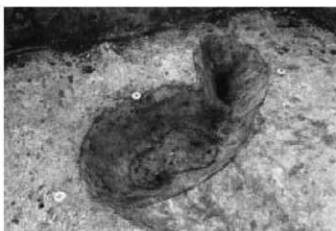
(4)住居跡検出状況



(5)調査状況



(6)調査風景



(7)02P完掘状況



(8)03P完掘状況

図版5 (1)~(8)二重堀遺跡e地点



(1)04完掘状況



(2)05P完掘状況



(3)06P・07P完掘状況



(4)07P完掘状況



(5)08P完掘状況



(6)09P完掘状況



(7)01M完掘状況



(8)出土遺物



(1)調査状況



(2)土層断面



(3)調査前状況



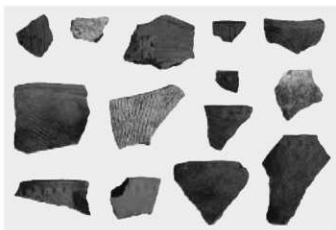
(4)住居跡検出状況



(5)土坑検出状況



(6)35T遺物出土状況



(7)出土遺物



(8)出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよしないいせきはくつちようさほうこうしょ へいせい14ねんど
書名	千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度
編集者名	武藤健一 宮澤久史 森電哉 朝比奈竹男
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047-483-1151
発行年月日	西暦2003年(平成15年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんばやし 新林遺跡 e 地点	やちよしかみこうやあざいなりまえ 八千代市上高野字福荷前1161-2他	12221	233	35度 43分 4秒	140度 7分 56秒	20010417 ～ 20010511	確認調査 288㎡/2,068.13㎡ 本調査 231㎡	宅地造成
たかつ 高津館跡 c 地点	やちよししたかつあざへた 八千代市高津字部田1336-1他	12221	238	35度 42分 49秒	140度 5分 32秒	20010418 ～ 20010507	確認調査 38㎡/336㎡ ～ 20010507	携帯電話用無線基地局建設
しんとうほら 新東原遺跡	やちよしかつあざしんとうほら 八千代市勝田字新東原1282-1他	12221	259	35度 41分 59秒	140度 8分 25秒	20010621 ～ 20010704	確認調査 264㎡/9,717㎡	病院建設
かみこうやおおやま 上高野大山遺跡	やちよしかみこうやあざさきほりごめ 八千代市上高野字笹畑込406-1	12221	225	35度 44分 11秒	140度 8分 25秒	20010718 ～ 20010723	確認調査 上層104㎡/490.67㎡ 下層 3㎡/490.67㎡	店舗建設
さかさみず 逆水遺跡 c 地点	やちよしなもとあざとりがや 八千代市米本字鳥ヶ谷1206	12221	100	35度 45分 37秒	140度 7分 16秒	20010816 ～ 20010823	確認調査 250㎡/2,919㎡	盛土造成
たかつなかむら 高津中村遺跡	やちよししたかつあざなかむら 八千代市高津字中村1116-2	12221	237	35度 42分 55秒	140度 5分 37秒	20010820 ～ 20010831	確認調査 ～ 34.3㎡/214㎡	携帯電話用無線基地局建設
しらほたまえ 白幡前遺跡 b 地点	やちよしあざだごうのうしろ 八千代市萱田字堂ノ後1757-1他	12221	185	35度 43分 33秒	140度 6分 40秒	20010917 ～ 20010921	確認本調査 214㎡	擁壁建設
さくやま 作山遺跡	やちよししいあざさくやま 八千代市小池字作山1412-1他	12221	1	35度 46分 34秒	140度 5分 39秒	20010925 ～ 20011009	確認調査 244.5㎡/2,323.61㎡	知的障害者授産施設建設
うちごめ 内込遺跡 b 地点	やちよしやちよしいあざ(あざうちごめ) 八千代市八千代台北(字内込)17-14	12221	246	35度 42分 40秒	140度 5分 25秒	20011207 ～ 20020108	確認調査 上層236㎡/2,013㎡ 下層 3㎡/2,013㎡	宅地造成
ふたえぼり 二重瀬遺跡 e 地点	やちよしかみこうやあざふたえぼり 八千代市上高野字二重瀬1236-15他	12221	231	35度 43分 10秒	140度 8分 3秒	20011214 ～ 20020125	確認調査 上層402㎡/2,384.11㎡ 下層 20㎡/2,384.11㎡ 本調査 128㎡	宅地造成
とのだ 殿台遺跡 b 地点	やちよしかみこうやあざとのだ 八千代市上高野字平沢148	12221	218	35度 44分 25秒	140度 8分 1秒	20020222 ～ 20020326	確認調査 68㎡/801㎡	資材置場建設
ほんごうだ 本郷台遺跡	やちよしやちよしいあざごて 八千代市桑橋字ゴテ670、675-1、 676、678	12221	65	35度 44分 57秒	140度 5分 3秒	20020222 ～ 20020326	確認調査 394㎡/5,100㎡	土砂採取

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新林遺跡 e 地点	包蔵地	縄文時代	陥穴 1基	なし	-----
	包蔵地	近世	シシ穴 溝 5基 1条	なし	
高津館跡 c 地点	城館跡	中世	なし	縄文土器、奈良平安時代土師器	
新東原遺跡	包蔵地	縄文時代	土坑 5基	縄文土器(後期)	-----
	包蔵地	近世以降	土坑 溝 4基 1条	なし	
上高野大山遺跡	包蔵地	平安時代	なし	平安時代土師器	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
逆水遺跡 c 地点	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡 1軒	弥生土器 (後期)	
高津中村遺跡	包蔵地	古墳時代 奈良平安時代	なし	なし	
白幡前遺跡 b 地点	包蔵地	奈良平安時代	土坑 4基 溝 2条	奈良平安時代土師器・須恵器	
作山遺跡	包蔵地	中世	火葬墓 3基 土坑 3基 溝 2条	弥生土器、中近世陶磁器	
内込遺跡 b 地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器 (早期)	
	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居跡 8軒	古墳時代土師器	
	集落跡	奈良平安時代	竪穴住居跡 3軒 土坑 5基 溝 1条	奈良平安時代土師器	
	包蔵地	近世	土坑 2基 溝 4条	なし	
二重層遺跡 e 地点	包蔵地	縄文時代	炉穴 4基 土坑 4基 溝 1条	縄文土器	
殿台遺跡 b 地点	包蔵地	奈良平安時代 中世	なし	なし	
本郷台遺跡	包蔵地	縄文時代	炉穴 2基 土坑 4基	縄文土器 (早・前・中・後・晩期)、 打製石斧、磨製石斧	
	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居跡 1軒 土坑 1基	古墳時代土師器	

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成14年度

印刷日 2003年 3月27日

発行日 2003年 3月31日

発行 八千代市教育委員会

〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2

TEL 047-483-1151